『眺めのいい部屋』とエドワード・カーペンターの愛の哲学

恒　川　正　巳

富山大学人文学部紀要第54号抜刷
２０１１年2月

『眺めのいい部屋』とエドワード・カーペンターの愛の哲学

恒　川　正　巳

E. M. フォースターの『眺めのいい部屋』（*A Room with a View* 以下 *RV*）は，１９０８年に出版された愛の理想を讃えるプロットをもった小説である。主人公ルーシー・ホニーチャーチ（Lucy Honeychurch）は，イタリア旅行で出会った青年ジョージ・エマソン（George Emerson）に恋をする。つのる想いを抑えつけようするが，最後には心の声に耳を傾け，ジョージと幸せに結ばれる。自分の心を偽ってジョージのことを忘れようとする彼女を目覚めさせるのが，ジョージの父エマソン氏（Mr Emerson）である。ルーシーの属する上流中産階級のエトスが偽善をささやきかけるのとは対照的に，エマソン氏はルーシーに愛の絆の尊さを説く。彼は主人公ルーシーを導く重要な人物である。『眺めのいい部屋』はフォースターの小説のなかで唯一，男女の愛を肯定的に表現した作品であり，エマソン氏は，そのハッピー・エンディングを支える屋台骨である。

エマソン氏には，モデルがいると考えられている。『エレホン』（*Erewhon*）を書いたサミュエル・バトラー（Samuel Butler）がそうだとされたこともあったが, 批評家タリク・ラーマン（Tariq Rahman）は，社会主義思想家エドワード・カーペンター（Edward Carpenter, 1844-1929）こそが，本当のモデルだと主張した。伝記作家ニコラ・ボーマン（Nicola Beauman）も同様にエマソン氏をカーペンターの代弁者と見なしている（Beauman 209）。

そこで本論では，『眺めのいい部屋』におけるカーペンターとフォースターの共鳴関係についてあらためて考察してみたい。エマソン氏が代弁しているとされるカーペンターの愛の哲学を具体的に確認する。カーペンターは，愛における性愛の存在を積極的に認めた。それはすなわち上流中産階級の偏狭さへの批判でもあった。この点でフォースターは，おおいに彼に共感した。反面，カーペンターが掲げる社会主義的共同体社会の理想は，フォースターにはあまり魅力的に映らなかったはずだ。フォースターは，みずからの出身階級に強い愛着と強い嫌悪の両方を感じていた。上流中産階級へのきわめてアンビバレントな思いは，社会主義的理想とはなじまなかっただろう。また，フォースターの思考は，個人の自由を絶対的な基盤とした，批判的で懐疑的な態度によって特徴づけられる。それは，いかなる種類の理想郷からも彼を遠ざけるものであった。これらを念頭におきながら，『眺めのいい部屋』から聞こえてくるカーペンターの声に耳を澄ましてみたい。

エマソン氏の人となりを確認することから始めよう。エマソン氏はまず，「社会主義運動家」として読者の前に現れる。ルーシーは，付き添い役として年配の従姉妹のシャーロット・バートレット（Charlotte Bartlett）をともないイタリアを旅した。シャーロットは，フィレンツェでエマソン親子に出会った少しあと，ビービ牧師に「エマソン氏を社会主義者と考えてよろしいのでしょうか？」（“Am I conclude . . . that he is a Socialist?”）と質問をする。ビービ氏は，「その便利な言葉を受け入れた」（“accepted the convenient word”）とある。エマソン氏を社会主義者と考えてよいと返答したのである（*RV* 8）。この当時の“socialist”という言葉は，暴力的な無政府主義者から議会活動派までを含んだ，幅の広い便利な言葉であった。小説はエマソン氏が具体的にどんな社会思想を持っていたのかは語ってはいない。ただ，労働者階級の人々の側に立つという点では，たしかに彼は社会主義的である。サンタ・クローチェ礼拝堂のなかで「中世の熱烈な信仰がこの礼拝堂を建てたのです」という声が聞こえてくると，エマソン氏は，我を忘れて声を張りあげ “Built by faith indeed! That simply means the workmen weren't paid properly.” と言わずにはおれなかった（*RV* 23）。従来の教養や芸術観が，富裕層の価値観に偏向したものであることを指摘せずに済ませることはできないのである。ビービ氏はこうしたエマソン氏の性質を思いうかべ，彼のことをsocialist と呼ぶことに同意したのであろう。このサンタ・クローチェ礼拝堂のエピソードは，エマソン氏の愚直な誠実さもあらわしている。彼としてはあくまで親切心からの行動であって，観光に来ている人たちに真実を伝え，役に立ちたかっただけなのである。しかし，彼の行動は無遠慮，発言内容は不穏当と見なされ，礼拝堂の観光客たちは，そそくさと彼から離れていってしまう。信念に忠実なあまり，結果として紳士淑女の礼節に反し，眉をひそめざるをえないような行動をとってしまっている。エマソン氏の飾り気のない不器用な社会主義がおかしく描かれた場面である。

中産階級批判は，多くの社会主義運動家に共通する。しかしエマソン氏の思想には，ほかの社会主義者と一線を画す特徴もあった。それが肉体への熱烈な敬意である。サマー・ストリートに引っ越してきたエマソン親子をビービ牧師とルーシーの弟のフレディ（Freddy）が表敬訪問する。出迎えたエマソン氏の息子のジョージは, フレディとは初対面であるにもかかわらず, いきなり，近くの池にいっしょに水浴びに行くことを提案する。ビービ氏は驚きながらも，その状況をこよなく楽しんで以下のように話す。

> “ ‘How d'ye do? How d'ye do? Come and have a bathe,’ ” he chuckled. “That's the best conversational opening I've ever heard. But I'm afraid it will only act between men. Can you picture a lady who has been introduced to another lady by a third lady opening civilities with ‘How do you do? Come and have a bathe’? And yet you will tell me that the sexes are equal.”（*RV* 126）

初対面の相手を水浴びに誘うのはとても愉快なことだが，しかしそれは男性同士だから可能で

あって女性同士のときには無理でしょうというわけである。するとそこへエマソン氏が登場し，「女性の場合も同じです」と返答し，ビービ氏との間で会話が進む。

> "I tell you that they shall be," said Mr Emerson, who had been slowly descending the stairs. "Good afternoon, Mr Beebe. I tell you they shall be comrades, and George thinks the same."
>
> "We are to raise ladies to our level?" the clergyman inquired.
>
> "The Garden of Eden," pursued Mr Emerson, still descending, "which you place in the past, is really yet to come. We shall enter it when we no longer despise our bodies"
>
> Mr Beebe disclaimed placing the Garden of Eden anywhere.
>
> "In this ― not in other things ― we men are ahead. We despise the body less than women do. But not until we are comrades shall we enter the Garden." (*RV* 126)

エマソン氏は自分なりの楽園観を明確に語る。彼は肉体蔑視からの人間性の解放と，その先にある同志の絆がもたらす至福を信じている。ただその信念を，よりによって牧師に向かって語っているところがおかしい。牧師を目の敵にして，議論で打ち負かそうという意地悪なことを考えているわけではない。ここでも彼はまた，ぶしつけになることなど顧みず，自分の信ずるところを口に出さずにはいられなかったのである。

肉体それ自体が尊厳に満ちていることをエマソン氏は強く信じている。小説の終わり近く，ルーシーは，ジョージへの思いをみずから抑圧し，上流中産階級の人生のルールに従って生きていこうとしている。偽りの自分を作り出し，家族や友人たちに本当の自分を見せないようにして，ジョージから逃げ出しギリシアに行ってしまおうとする。そんなルーシーを，エマソン氏が救う。ルーシーとジョージはお互いを愛している，ともに生きる以外に道はない。熱烈に語りかけるエマソン氏の言葉に, ついにルーシーは心の奥底の自分自身をはっきりと見据える。抗しがたい愛の力についてエマソン氏は次のように語る。

> "It isn't possible to love and part. You will wish that it was. You can transmute love, ignore it, muddle it, but you can never pull it out of you. I know by experience that the poets are right: love is eternal. . . . I only wish poets would say this, too: that love is of the body; not the body, but of the body. Ah! the misery that would be saved if we confessed that! Ah for a little directness to liberate the soul!" (*RV* 202)

愛は不滅だ。多くの詩人が詠ってきたとおりである。しかし詩人たちが詠ってこなかったことがある。それは愛が肉体なしでは存在しないということだ。エマソン氏は，愛における性の意義を熱く語る。

エマソン氏は，社会主義者と呼ばれ，愛の教義を説き，肉体の重要性を訴える。社会主義思想と性愛の擁護の組み合わせは，エドワード・カーペンターを強く連想させるものである。

カーペンターは１９世紀末から２０世紀初めに活躍した社会主義思想家である。フォースターは，『眺めのいい部屋』の執筆過程でカーペンターの影響を受けたと考えられる。フォースターは，１９０１年から１９０２年の冬に『眺めのいい部屋』の構想を練り始めた。完成には苦労し，あとから書き始めた『天使も踏むを恐れるところ』（*Where Angels Fear to Tread*）と『ロンゲスト・ジャーニー』（*The Longest Journey*）のほうが先に出版された。完成に向かって執筆が順調に進んだのは１９０７年になってからである。その年の大晦日にフォースターが一年を振り返って書いた読書リストがあり，そこにカーペンターの名前がある（Beauman 211）。

カーペンターは，『民主主義に向けて』（*Towards Democracy*, 1881-1912),『イングランドの理想』（*England's Ideals*, 1887),『文明』（*Civilisation*, 1889),『産業の自由に向けて』（*Towards Industrial Freedom*, 1917）などの著書で，物質文明を強く批判した。過剰な物欲にとりつかれた上流中産階級の生活は，本来は不要な品々に埋め尽くされ，労働者階級からの搾取によって支えられていると，自分の出身階級を厳しく糾弾する。そして，所有関係と資本関係にがんじがらめにされた物質文明はいままさにその末期にあるとして，進化の次段階である，協働（co-operation）を柱とした共同体社会が到来することを説いた。この共同体社会では，個人の自由と平等が何よりも重んじられる。自由と平等が確立した社会で，人はその存在の本質に立ち返ることができる。本来の姿を取り戻した人間は，おのずと人類全体に善なる行動をとるようになる。個人の意識は，人類全体の意識と自然に結ばれるのである。人類と世界に浸透する「宇宙的意識」（the Cosmic Consciousness）については，『創造の芸術』(*Art of Creation*, 1904）に詳しい。

カーペンターの思想では，進化の概念がきわめて重要な役割を果たしている。楽観的で神秘主義的な進化への信頼が彼の思想を貫いている。所有欲に毒された文明は，人間社会を荒廃させた。しかし, それは意味なく起こったことなのだろうか。彼は詩的高揚とともに問いかける。

> Do you suppose it is all for nothing that disbelief has gone out over the world; that weariness has taken possession of the souls of the rich, and that fatal darkness enfolds the head of wealth and education.? . . .
>
> When Labor is not loyal and true, nor the Laborers loyal and true to each other; when a man has no pride in the creation of his hands, nor rejoices to make it perfect; when machinery is perfectly organised and human souls are hopelessly disorganized;
>
> Do you think all these things mean nothing? (*Towards Democracy* 49 – 50)

機械的な物質文明や人間性から疎外された個人の姿は，いずれも進化のなかの一つの段階にすぎない。それが彼の答えである。古い制度や生活がはげ落ちるとともにやがて，人間と世界にとってより自然な段階が訪れる。眼前に広がる文明の悪しき姿は，人間精神が進歩していくために避けては通れない道であると同時に，新しい段階にいたるまでの仮の状態にすぎない。カ

ーペンターの考える進化とは，はっきりと幸福な方向性をもつものだった。

カーペンターは，内的要因が進化を促すとするラマルク（Jean-Baptist Pierre Antoine de Monet, Chevalier de Lamarck, 1744-1829）の考え方を明確に支持した。「はく落：ラマルク対ダーウィン」（“Exfoliation: Lamarck vs Darwin”）と題された文章の中で彼は，ダーウィンの自然淘汰の考え方は，外的要因による進化を基本とするがゆえに，あくまで副次的なものにすぎないと述べている。

> On the whole then, judging from man himself, . . . it certainly seems to me that, though the external conditions are a very important factor in Variation, the central explanation of this phenomenon should be sought in an inner law of Growth − a law of expansion more or less common to all animate nature. Partly because, as said before, the unfolding of the creature from its own needs and inward nature is an organic process, and likely to be persistent, while its modification by external causes must be more or less fortuitous and accidental and sometimes in one direction and sometimes in another; partly also because the movement from within outwards seems to be most like the law of creation in general. Under this view the external conditions would be considered a secondary − though important cause of modification; and regarded rather as the influences that give form and detail to the great primal impulse of growth from within. (*Civilisation* 170-71)

内的性質がうながす外的形態の変化は，有機的で持続的な発達をもたらす。それに対し，外的環境に起因する形態変化は，偶発的で，種がどんな方向に進むのかが運任せなのである。

この文章のすこし前で，カーペンターは「適者生存」のことを，「偶然にそう生まれついただけで手に入れられる外的で安易な成功」（“a sort of easy success won by an external accident of birth”）と呼んでいる。獣の牙から逃れるという理由だけで人間が二足歩行できるように進化したとすれば，「生き物の王であり支配者である人間」（“Man, the lord and ruler of the animals”）にあまりに似つかわしくない。だが，内的要因による進化の考え方によれば，たとえ野獣から逃げのびるために肉体の進化がうながされたとしても，そこには進化を望む内的願望（“desire”）と明確な到達点が存在する。獣ではなく，人間の願望こそが進化の決定的要因なのである。この進化のことを，カーペンターは，“the uphill fight of a nature that has grown inwardly and wins expression for itself in spite of external obstacles” と形容した（*Civilisation* 169-70）。苦難に打ち勝ち，自己を表出する人間の高貴な姿がイメージされているのがわかる。苦難の末に進化がもたらされるというこの考え方は，物質文明がやがて乗り越えられ，社会主義的な共同体社会が到来するという彼の思想にも見られたものだ。種としての人類の進化と，社会形態の進化が，同工異曲の物語を描いている。

カーペンターは，進化を生じさせる内的願望についてさらに考察し，愛こそが，内的願望の

もっとも高次なものであり，人間を現在の姿に進化させた最大の要因だと結論する。なぜなら人には，人間としての身体を求める願望があるからだ。彼はつぎのように述べている。

> And this Love, which is the culmination of desire, does it not appear to us as a worship of and desire for the bodily human form; in our interior selves a perception and worship of an ideal human form, the revelation of a Splendour dwelling in others, which − clouded and dimmed as it inevitably may come to be − remains after all one of the most real, perhaps the most real, of the facts of existence? Desire, therefore − as it exists in man, look at it how you will − as it unfolds and its ultimate aim becomes clearer and clearer to itself, is seen to be the desire and longing for the deliverance and expression of the real human Being. (*Civilisation* 176-77)

愛には，他者の肉体を求める気持ちが刻みこまれている。ここでは人類レベルでの肉体の進化と愛の関係について述べられているのだが，その記述は容易に個人レベルでの愛と性の関係を想起させる。カーペンターの思想は，個人と全体（部族から人類まで）の無意識的な一体化を特徴としつつも，根本には個人の自己表出という概念が横たわっている（Rowbotham 146）。彼のいう理想的共同体とは，個人の絆のネットワークである。カーペンターは人間を集団としてのみ分析することはしなかった。彼が進化について語るとき，そこにはつねに個人の存在がある。愛を人間の進化の頂点に位置づけたとき，そこに愛と性のテーマが重ねられているのもカーペンターらしい。

愛と性の問題への関心は，カーペンターの思想を特徴づけるものである。カーペンターは同性愛者であった。１８８５年に売春婦の同意年齢が１３歳から１６歳に引き上げられる刑法改正が行われた。このときにラブシェア修正条項なるものが追加される。この修正条項によって，公共の場のみならず，プライベートな領域を出ない男性同性愛までもが犯罪と見なされるようになってしまった（都築 99；Rowbotham 103）。カーペンターは，ラブシェア修正条項を撤廃に追い込むため，同性愛擁護のキャンペーンを実行に移し，１８９４年から１８９５年にかけて性に関する４編のパンフレットを発表する。しかし折悪く，翌年にはオスカー・ワイルドが同性愛の罪によって有罪となり，２年の重労働を科せられる事件が起きてしまう。同性愛者たちが社会からの抑圧を実感せざるをえない状況のなか，カーペンターも思うような活動ができなくなる。それでもカーペンターは，いっそうの慎重さと粘り強さで性の問題を提起し続けた（Rowbotham 200）。１８９４年に発表されたパンフレットのうち３編は，１８９６年に『愛の成熟』（*Love's Coming-of-Age*，以下 *LCA*）としてまとめられ，同性愛を主題とする残る１編も１９０６年の第５版で収録された。『眺めのいい部屋』執筆当時，同性愛者としてのアイデンティティを模索していたフォースターは，同性愛に関係した書物を集中的に読んでいた。そのなかにウォルト・ホイットマン（Walt Whitman），J. A. シモンズ（J. A. Symonds），A. E. ハウスマン（A. E. Houseman）などとともに，カーペンターが含まれていたのである。『愛の成

熟』は，出版当初こそ書評にもまったく取り上げられない冷たい扱いを受けたが，口コミで着実に売れ続けた。ドイツ語やフランス語などにも翻訳され，多くの読者を獲得することになる（Rowbotham 218）。

当時の社会通念に挑み，カーペンターは，肉体が愛にとって欠くべからざるものであると主張した。文明化以前，もともと人は性的欲求をおおらかに受け入れていた。性は，根源的な活力を象徴する輝かしいものだった。しかし，人間は自然とのそうした無意識的な調和を捨てさってしまう。

> While the glory of Sex pervades and suffuses all Nature; while the flowers are rayed and starred out towards the sun in the very ecstasy of generation; while the nostrils of the animals dilate, and their forms become instinct, under the passion, with a proud and fiery beauty; while even the human lover is transformed, and in the great splendors of the mountains and the sky perceives something to which he had not the key before — yet it is curious that just here, in Man, we find the magic wand of Nature suddenly broken, and doubt and conflict and division, entering in, where a kind of unconscious harmony had erst prevailed. (*LCA* 5)

文明化が進み，性は抑圧されていく。キリスト教に代表される禁欲主義的な思想が支配した近代において，肉体的愛は精神的な愛と切り離され，汚らしいものとして隠蔽された。カーペンターは，愛の身体性の回復を主張する。分離されてしまった愛と性を，もう一度結びつけようとしたのだ。愛と性は本質的には同じものなのではないのか。彼は問う。

> May we not say that there is probably some sort of Transmutation of essences continually effected and effectible in the human frame? Lust and Love — the *Aphrodite Pandemos* and the *Aphrodite Ouranios* — are subtly interchangeable. Perhaps the corporeal amatory instinct and the ethereal human yearning for personal union are really and in essence one thing with diverse forms of manifestation. (*LCA* 7)

性愛は，精神的な愛に何ら引けをとるものではない。両者のちがいは，顕在の多様性をあらわしているにすぎない。むしろ性愛は愛をより完全なものにする。知的・精神的側面のみで相手とつながる愛もありうるかも知れない。しかし，そうした愛がじゅうぶんに深まることはまれで，長続きしないとカーペンターは考える。

『眺めのいい部屋』のエマソン氏の“love is of the body”という信念は，カーペンターのこうした思想を強く反映していると考えていい。愛の根源には肉体があるのだ。フォースターがカーペンターに共感した理由のひとつは，カーペンターの性愛の擁護が，上流中産階級の偽善的な上品さを批判する視点を提供したことである。それは上流中産階級のイデオロギーへのアンチテーゼであった。『眺めのいい部屋』でのルーシーの最大の敵は，自分が属する階級の世間体のよさ（respectability）である。とりすました上品さが，わき上がる感情を型にはめ込み封

じ込めてしまうおうとする。それにいかに抵抗するか。フォースターの小説のうち最初の３作品は，いずれもこの世間体と心の対立を描いている。３作品のなかで，心の側が明確に勝利したといえるのは『眺めのいい部屋』だけである。カーペンターの性愛の哲学が，フォースターに優秀な武器を与えたといっていいだろう。理想郷を追い求めるカーペンターの楽観的な思想は，心の勝利を描く小説にはふさわしいインスピレーションだった。

エマソン氏は,「同志になってこそ, はじめて楽園に入ることができる」と熱弁していた。「同志」という言葉も, カーペンターのキーワードだ。カーペンターの考える同志愛（comradeship）は, 完全な平等と自由のもとでの親愛である。それは理想共同体社会の個人を結ぶ絆だ。また, それは女性を隷属させる家父長制社会の批判を含んでもいた。カーペンターは，愛が成熟することで，人間が本来持っているさまざまな能力や性質が協調的に働くようになると説く。しかし男性と女性では，その成熟の度合いに差が生じる。女性は，生まれつき自然の摂理に近い存在であり，深遠で神聖な本能をうちに秘めている（*LCA* 40)。これに反し男性は，愛への関心が薄く，その意味を理解することがむずかしい。男性の愛情は，女性より強いのだが，その手綱をあやつる技量では女性にいちじるしく劣る。こうして心の成長をともなわないまま成人する男たちは，いわば女性に八つ当たりするかたちで暴君と化し，女性を隷属させる。暴走する性衝動をエネルギーとして，物質的には繁栄するが，人間的な愛情をひどく欠いた社会を作り出してしまうのである (*LCA* 25 - 27)。

> Anyhow, the point is that Man with his great uncoordinated nature *has* during these later centuries dominated the other sex, and made himself the ruler of society. In consequence of which we naturally have a society made after his pattern − a society advanced in mechanical and intellectual invention, with huge passional and emotional elements, but all involved in whirling confusion and strife − a society ungrown, which on its material side may approve itself a great success, but on its more human and affectional side seems at times an utter failure. (*LCA* 28)

カーペンターの同志愛は，こうした性差の不平等を廃し，男性と女性が真に自由で平等な絆を結ぶことも示唆していた。エマソン氏がルーシーに愛の意味を語るとき，そこにはこのカーペンターの理想が奏でられていたといっていいだろう。

一方，カーペンターの同志愛の概念が，同性愛を擁護する目的を持っていたことも忘れてはならない。このことは，カーペンターの思想をフォースターにとってより魅力的なものにしただろう。カーペンターは，『愛の成熟』に１９０６年に追加された章のなかで，男性と女性の境界線上にある「中間の性」（“the intermediate sex”）が存在することを主張し，すべての同性愛者を無条件に忌まわしい異常者と見なす当時の通念を批判した。さらには，同性愛者は男女の性の気質を兼ねそなえていることがあるため，異性愛者には困難と感じられる役割を果たすことができるとした。人類の発展における同性愛者の存在価値を積極的に強調したのである。

この主張は１９０８年出版の*The Intermediate Sex*で，さらに広がっていく。『眺めのいい部屋』執筆当時，フォースターは同性への愛情をはっきりと自覚していた。そんな彼に，カーペンターの同性愛の擁護が大きな啓示になったであろうことは想像に難くない。それはのちに書かれる同性愛を主題とする小説『モーリス』（*Maurice*）が，より直接的にカーペンターの影響を受けていることからも明らかである。

もっとも，『眺めのいい部屋』に限るなら，同性愛は隠れたモチーフとして考えておくのが妥当だろう。点在する同性愛的なコノテーション（たとえばジョージとフレディ，ビービ氏の３人の水浴びの場面や，ビービ氏が示した結婚へのあまりに冷淡な態度など）は無視できないにしても，作品全体のバランスからして，ルーシーとジョージの男女の愛こそが作品の求心力であると考えるべきだ。"comradeship" という語も, 二人の愛を肯定するように使われている（RV 44; ch. 4, 154; ch. 15）。 エマソン氏の唱える同志愛も，第一義的には男女間の自由と平等の関係をあらわすものととらえておきたい。

フォースターは，肉体的愛の抑圧からの解放に共感し，『眺めのいい部屋』のなかでエマソン氏にカーペンターを二重写しにした。しかしフォースターは，カーペンターの愛の哲学の全体をそのまま採用したわけではなかった。あえてカーペンターの思想の一部のみを取り入れたのである。それを確かめるために，愛の本質についてのカーペンターの考えをさらにたどってみよう。

カーペンターが唱えた肉体的愛の正当性は，当時としては反社会的なまでに大胆なものであった。愛（Love）と対立すると考えられていた性欲（Lust）を，愛とは切り離せないものと主張したからである。たとえば『文明』において彼は，所有欲に突き動かされた文明によって人間が堕落し，それまでは一体のものであった愛と性愛が区分されることになったのだと主張している。以下の引用で注目すべきは，精神的な愛が「内側の愛」，性愛が「外側の愛」と呼ばれていることである。

> Accordingly we find that it has been the work of Civilisation − founded as we have seen on Property − in every way to disintegrate and corrupt man − literally to corrupt − to break up the unity of his nature. It begins with the abandonment of the primitive life and the growth of the sense of shame（as in the myth of Adam and Eve). From this follows the disownment of the sacredness of sex. Sexual acts cease to be a part of religious worship; love and desire − the inner and the outer love − hitherto undifferentiated, now become two separate things. (*Civilisation* 31-32)

カーペンターは，愛と性愛はもともと区別されるべきではないとしながらも，文明によって愛が分断されてしまった現状を踏まえ，愛と性愛を別個に論じる。その際に彼は，前者を内なるものとし，後者を外なるものと区分した。カーペンターの思想には，内的なものと外的なもの

の区分がつねに存在する。内的なものと外的なものは，ときには明確な対立関係を構成し，ときには一つの事象の異なるレベルを明示してみせるのに使われる。内なるものは, 本質や精神, 普遍性などを表し，外なるものは，表層，表出，具現の概念によって特徴づけられる。この両者のうち，より重要なのは内なるもののほうだというのが，カーペンターの一貫した主張である。愛についての考察も例外ではない。性愛は人間に不可欠なものであり，性の喜びは，まったく自然なものである。しかし，外側の愛である性愛は，内なる精神的な愛との関係では二次的なものにすぎない。性愛を目的として追い求めてはならないとカーペンターは述べる。

> In going off in pursuit of things external, the “I”（since it really has everything and needs nothing）deceives itself, goes out from its true home, tears itself asunder, and admits a gap or rent in its own being. This, it must be supposed, is what is meant by sin － the separation or sundering of one's being － and all the pain that goes therewith. It all consists in seeking those external things and pleasures; not (a thousand times be it said）in the external things or pleasures themselves. They are all fair and gracious enough; their place is to stand round the throne and offer their homage － rank behind rank in their multitudes － if so be we will accept it. But for us to go out of ourselves to run after them, to allow ourselves to be divided and rent in twain by their attraction, that is an inversion of the order of heaven. . . . Pleasure should come as the natural（and indeed inevitable）accompaniment of life, believed in with a kind of free faith, but never sought as the object of life. It is in the inversion of this order that the uncleanness of the senses arises. (*LCA* 14-15)

性の喜びは，本来は美しく優雅だ。しかし性愛はあくまで外的なものである。内的なものを軽視し外的な喜びを追い求めるとき，そこに倒錯が生まれる。性愛は，精神的な愛の統制のもと，適切な位置に収まらなければならないのだ。

> As long as the objects of the outer world excite emotions in him which pass beyond his control, so long do those objects stand as the signals of evil － of disorder and sin. Not that the objects are bad in themselves, or even the emotions which they excite, but that all through this period these things serve to the man as indications of his weakness. But when the central power is restored in man and all things are reduced to his service, it is impossible for him to see badness in anything. The bodily is no longer antagonistic to the spiritual love, but is absorbed into it. All his passions take their places perfectly naturally, and become, when the occasions arise, the vehicles of his expression. (*Civilisation* 53)

カーペンターの考える愛が，きわめて調和的で破綻のないものであることが目立つ。その調和のなかでは，性愛は二次的なもの，次善の存在である。このことをカーペンターは，より印象的に，そして決定的に「性交は，真実の愛の結びつきのアレゴリーである」（“the Prime object of the sex is the physical union as the allegory and expression of the real union”）と述べている（*LCA*

21)。

カーペンターは性愛のスティグマをはぎ取った。愛を語るとき，肉体から目を背ける必要はない。それが彼の主張だった。同時にしかし，性愛は精神的愛の支配下に置かれるべきものとして位置づけられもした。性愛は精神的愛に吸収される。その過程は，極上のワインのようにわれわれを酔わせるとカーペンターは述べる。

> How intoxicating indeed, how penetrating − like a most precious wine − is that love which is the sexual transformed by the magic of the will into the emotional and spiritual! (*LCA* 6)

性愛の昇華が官能的なイメージで描かれているところに，カーペンターの愛の思想が凝縮されているといえるだろう。

愛と性愛はもともと一体であったが，文明の悪影響のせいで分化したとカーペンターは考える。人類の進化の過程で，物質文明が共同体社会に置き換えられるという彼の考え方からすれば，愛と性愛の分離もやがては必然的に解消されるはずのものということになる。愛の進化の次段階は, 性愛が内なる愛に昇華されることでもたらされるということのようだ。もちろん，このカーペンターの論理には，社会からの弾圧をかいくぐる戦略があったことも忘れてはならない。精神的愛への昇華を前面に出すことで，性愛を論ずることへの拒絶感をかわそうとする意図は当然あったはずである。ただそのことを考慮に入れても，内なるものへの傾斜がカーペンターの思想全体に見られることは否定できない事実である。

カーペンターは，性愛と高貴な人間性の共存を可能にした。それは肉体を抑圧した文明への反乱であり，上流中産階級の偽善的生活への批判だった。フォースターは，これに大いに共感したことだろう。エマソン氏による愛の身体性への言及は，フォースターとカーペンターの共鳴関係の証左である。一方，フォースターがカーペンターの精神的愛への昇華にまったく触れていないことを考えると，それは二人の相違点を示すものでもあった。のちにカーペンターのより大きな影響下で執筆された『モーリス』でも，精神的愛の優位性の主張は採用されていない。このことを考えれば，『眺めのいい部屋』におけるカーペンター思想の取捨選択は，はっきりと意図的であり，作者の重要な特質をあらわすものといえよう。

『眺めのいい部屋』の側から，愛についてもう一度考えてみよう。エマソン氏は，ルーシーにつぎのように語っていた。

> He is already part of you. Though you fly to Greece, and never see him again, or forget his very name, George will work in your thoughts till you die. It isn't possible to love and to part. (*RV* 202)

エマソン氏がここで語る愛は，ジョージとルーシーの愛であり，あくまで個人と個人の間の愛である。カーペンターは，「われわれは愛する人の姿に理想を見る」（“We see the Ideal in the figure of our lovers”）と述べた（*Art of Creation* 137）。しかし『眺めのいい部屋』においてルー

シーが，ジョージの姿を透かして何かしらの理想を見ているそぶりはまったくない。カーペンターの愛の哲学では，個人同士の愛は，つねに人類全体が共有する普遍的な愛とつながっていた。カーペンターの思想がそもそも，個人と人類の間にある不可分のつながりを前提としていたからである。「単位人」（“the unit-man”）と「集団人」（“the Mass-man”）は，継ぎ目のない絆でつながり（*Civilisation* 35），個人の意識は，世界全体を包む普遍意識をつねにうちに秘めている（*Art of Creation*, 46 - 62）。孤立した自己意識を持つ個人は，歴史の流れのなかで，克服されるべき一つの段階にすぎないものであった（*Art of Creation*, 211-22）。

これに対しエマソン氏の説く愛の激しさは，個人が，社会や人類と容易に一体化できない状況から生まれてくるものである。社会通念に背きながら，家族に反対されながらも，愛する相手を求める激しさである。そこには社会と個人の間に明確な隔たりがある。他の誰かではない，愛する相手のみとの一体化を求める，排他的であることをいとわない愛である。エマソン氏は，こうも言っている。

> “I taught him to trust in love. . . . I said: ‘When love comes, that is reality’. I said: ‘Passion does not blind. Passion is sanity, and the woman you love, she is the only person you will ever really understand.’ ” (*RV* 196)

愛の熱情は，理解し合える唯一の相手を指し示す。それは孤独と表裏一体のものだ。そのきわめて個人的で，イディオシンクラティックな激しさは，人類愛と結びついてしまえば，確実に失われるたぐいのものであろう。それは，ジョージが陥った生への絶望，「宇宙的悲痛」（“world-sorrow”）があってこそ，はじめて生まれるものといってもいい（*RV* 27）。カーペンターも，“passion” という語を好み，“lust” , “desire”, “feeling” などの言葉を置き換えるかたちでよく使用したが，ここでのエマソン氏のように，社会的な疎外感を逆手にとるような激しさはなかった。

フォースターは，カーペンターの唱える宇宙的意識と個人の間の調和的一体感という理想を共有はしなかった。フォースターは，人間の本質を調和ではなく，混乱ととらえていたはずである。“muddle” という，フォースターが好んで使った言葉が，それをよく表している。フォースター作品のキーワードである “muddle” は，自己欺瞞によって支離滅裂になった状態をあらわすとともに，押しつけられた社会的秩序になじむことのできない個人の，千々に心乱れる真実の姿をあらわす言葉である。カーペンターは愛に肉体の存在を認めたが，一方で精神的な愛を理想とし，性愛はその反映であるとも述べた。きわめて調和的な世界観へとつながる愛の昇華の考え方は，フォースターの心には響かなかったといっていい。カーペンターとフォースターの特質はこの点において明らかに異なる。小説のなかでエマソン氏は「自然」について，以下のようなひねりのきいたコメントをする。

> I believed in a return to Nature once. Today, I believe that we must discover Nature. How can we

return to Nature when we have never been with her? (*RV 126*)

「自然」は，外的自然に加えて，内的自然を意味する。それは人のなかに存在する無意識的でおのずとあふれ出る本能をあらわすカーペンター思想のキーワードである。そのいたって真剣なキーワードから軽妙な警句を作り出し，それをエマソン氏にいわせるあたり，読者を煙に巻くフォースターらしさが存分に発揮されている。

伝記作家のロウボサムが明らかにしているように，カーペンターは社会主義運動において，また同性愛者として，じゅうぶんに混乱，対立，葛藤を味わった。しかし，そうした経験を表出する際には，調和と希望を特徴とする統一的な構造を与えることを選んだ。愛は，性愛が精神的なものへと昇華したのち，宇宙的なレベルの調和の象徴になる。これに対し，フォースターの描く登場人物たちは，上流中産階級社会との葛藤に苦しみ，板挟みになり，深い矛盾を抱えている。彼らは，カーペンターが描く理想郷に居場所を見つけることはできなかったであろう。『眺めのいい部屋』が描いた愛は，個人と社会，個人と個人の対立のなかにこそ生まれるきらめきである。

引用文献

Beauman, Nicola. *Morgan: A Biography of E. M. Forster*. London: Hodder & Stoughton,1993.

Carpenter, Edward. *Art of Creation: Or Essays on the Self and Its Power*. London: George Allen, 1904.

―. *Civilisation: Its Cause and Cure and Other Essays.* 1889. New York: Charles Scribner's Sons, 1921.

―. *England's Ideal and Other Papers on Social Subjects.* 1887. London: Swan Sonnenschein, 1909.

―. *Love's Coming-of-Age: A Series of Papers on the Relations of the Sexes*. 1896. 5th ed. London: Swan Sonnenschein, 1906.

―. *The Intermediate Sex: A Study of Some Transitional Types of Men and Women*. 1908. London: George Allen, 1912.

―. *Towards Democracy.* 1883. New York: Mitchell Kennerley, 1912.

―. *Towards Industrial Freedom*. 1917. 2nd ed. London: George Allen & Unwin, 1918.

Forster, E. M. *A Room with a View*. 1908. London: Edward Arnold, 1977

―. *Howards End*. 1910. London: Edward Arnold, 1973.

―. *Maurice*. 1971. London: Edward Arnold, 1999.

―. *The Longest Journey.* 1907. London: Edward Arnold, 1984.

―. *Two Cheers for Democracy*. London: Edward Arnold, 1972.

―. *Where Angels Fear to Tread*. 1905. London: Edward Arnold, 1975.

Rahman, Tariq. 'Edward Carpenter and E. M. Forster.' *Durham University Journal* 79 (1986). Rpt. In *E. M. Forster*: *Critical Assestments.* Ed. Stape, J. H. Vol. 4. Mountfield, East Sussex: Helm Information, 1998.

Rowbotham, Shiela. *Edward Carpenter: A Life of Liberty and Love*. London: Verso, 2008.

都筑忠七 .『エドワード・カーペンター伝：人類連帯の予言者』. 東京：晶文社 , 1985.